Bulletin of the Faculty of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1985, Vol. 32, 245 − 255.

重度・重複障害幼児の集団療育（8）*

――初心の療育者における発達の課題――

後藤秀爾[1)]　村上英治　森崎康宣[2)]
加藤礼子[3)]　中　美由紀[4)]

重い知恵おくれの子どもたちと共に歩む仕事は楽しい。辛くても，苦しくても，楽しいものなのである。
――福井達雨「子どもに生かされ・子どもを生きる」より

Ⅰ．問題と目的

歴年齢6歳に近づいてもなお首も座らないような重度重複の障害児といえども，人とのかかわりを通して常に発達し続ける存在であることに違いない。その発達的変化は，目にとまらぬほどの微細なものであるかも知れない。また，子どもの示す反応は，働きかけに対する反応とは理解できないようなものかも知れない。それゆえに，そこで要請される療育者の姿勢は，表面的な行動の変化を追求し，みかけのやりとりを形成しようとする類いのものではなく，その背景に生起する情緒的な高まりや落ち込み，不安感や安心感などの動きと触れあい，共鳴しようとすることであり，さらには，より精神的な次元で存在感を共有しようとする視点を持つことである。療育者が，子どもの側の目に見える反応や変化を追い求める限りにおいて，こうした重度重複の障害児との取り組みは，遅かれ早かれ無力感に支配され，挫折感のうちにかかわり意欲を喪失するような事態を迎える。療育者が，子どもの前で，虚心になり得た時にようやく，見えなかった子どもの姿が見え始めることになるのである。

向野（1978）が，その著書の中で述懐している次のようないきさつは，この点を端的に示している。すなわち，養護学校の教師であった向野は，重度の悩性マヒ児やっちゃんの言語指導につきあたり，悩んだ末に，“ことば”の前に“こころ”なのだと気付いていく。“やっちゃんのからだの緊張やアテトーゼがことばだとわかった日，私はやっちゃんを抱きしめて話をしました。やっちゃんはからだを硬くしたり，柔らかくしたり，足を突っぱったり，手を上げようとしたり，一語一語，私の話に反応をしました。目や口の動きも，よだれ洟も涙もツバも，全部が全部，ことばなんだということが，抱きしめているとよくわかりました。”向野はこうして，やっちゃんの“ことば”を理解し，“こころ”を通わせることが可能となった。そしてこのこと自体が，重要な発達援助活動であることを洞察していく。私どもは，この体験から多くのことを学ぶべきであろう。

しかしながら，これはきわめて体験的な感覚である。初心の療育者が，知的な水準で，このことを観念的に理解していたとしても，実際の取り組み過程においては，やはりさまざまに思い悩み，無力感や自己嫌悪に苦しみ，子どもに焦りをぶつけたり，いったん離れたりといった形の動揺を示してくることになる。むしろ，こうした迷いと困惑の時期を経ることによって，療育者は，はじめてそうした深い水準での理解の目を開くことができるといってもよい。重度の障害を持った子どもたちとの取り組みは，それ自体，さまざまな形での自己対決を療育者に要請してくるものである。そして療育者は，自分自身のなまのかかわり体験を通して，自己内に生ずる種々の問題と取り組んでいかねばならない。

---

*　本研究はトヨタ財団昭和58年度研究助成金（助成番号83－2－Ⅲ－047）の援助を得て行われた継続研究の一環をなすものである。なお本論文の要旨は，東海心理学会第34回大会において発表された。

1）愛知学泉女子短期大学
2）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期）
3）名古屋大学心理教育相談室
4）名古屋大学教育学部研究生

これらのことを含みながら，私どもがこれまで，療育者の成長・発達に関して論じてきた視座は，およそ次の2点にまとめられる。

その第1は，これらの重度重複の障害児たちと取り組むにあたって，療育者のかかわり意欲を維持し，高め続けていくことが，きわめて基本的な課題となるということである。そして，そのために，療育者が子どもの中にある発達の可能性や発達のきざしを感じたり，この子どもたちの生きることの意味深さに気付くことが，重要な転機となることが多いといえる。（譲ら　1980）

第2に，療育者の成長は，特に初期過程において，単に療育技術が上達するとか，発達理論に精通するとかいうだけのものではなく，その根底に，療育理念を実感的に深める部分があって，初めて可能となるものである。言葉をかえれば，理念と技術と理論の3側面が，療育者の内で統合される過程ということもできる。（後藤ら 1984）

ところで，療育者のそうした内的成長・発達の過程には，いくつかの節目があると考えられる。それは実践の中で体験を通して乗り越えるべき，療育者としての発達課題ということもできる。これまでの私どもの経験を振り返ってみても，その発達課題は，多くの療育者に共通する部分も大きく，また一定の順序性を持っているように受け止められる。療育者の側の資質や個性，また子どもの側の障害の程度や内容，あるいは両者の相性などを要因として，さまざまな異なったニュアンスを持ち，ある場合には意識されることなく通り過ぎたり，ある場合にはそこで行き詰まったりするものである。

今回の報告で明らかにしようとすることは，そうした重度重複の障害児と取り組む療育者の内的発達課題が，どのような形で顕在化し，克服されていくかということであり，とりわけその初期過程のあり方についてである。それが，これまでの2つの報告とあいまって，療育者自身の成長・発達のあり方に，多面的な光を投げかけることになると考えられよう。

Ⅱ．方　法

昭和59年度の療育対象児は，先年度に引き続き参加してきたマキコ（5歳2カ月女児），ノブコ（5歳0カ月女児），ヨシフミ（4歳11カ月男児）の3名に，6月途中より参加することになったユウコ（5歳2カ月女児）を加えた4名であり，そのひとりびとりに，初めて療育に参加した療育者が担当として取り組むことになった。

4名の子どもは共に，悩性マヒの診断を受けており，発達水準でいえば，定頸の完成していない最重度の障害と，てんかん発作を併せ持っている。

療育者は，学部4年の3名（板倉，後藤由，藤本）と学部研究生1名（中）の女子4名が，1年目のスタッフとして加わり，それぞれ，ヨシフミ，ノブコ，マキコ，ユウコを担当した。そこに，経験2年目，4年目の男性療育者が，担当を持たない流動的な立場で加わり，先輩としての助言を行なってきた。これらの療育者は，先行経験として，重度心身障害児施設での1週間のかかわり実習を体験している。療育が始まってからは，村上，後藤秀両名のスーパーヴィジョンを受け，週1回の療育終了後には，グループ内での相互研修の機会を持ちながら1年間をすすめてきた。

今回の検討は，その4名の初心療育者の内的体験過程を中心に，これまでの経験から得られた知見を加えつつ，すすめたいと思う。その体験過程は，年度の終わりに，各自のまとめた実践記録に基いて，療育スタッフ全員で討議した内容から再構成したものであることを，ことわっておきたい。

Ⅲ．4人の療育者の体験過程

1．ヨシフミとの取り組み（板倉の場合）

第Ⅰ期<子どもの笑顔が喜べない，5～7月>

ヨシフミが担当児と決まった時，障害の重いこのグループの子どもたちの中でも，ひときわ障害が重そうな印象であったことが，板倉の気持ちを重くしており，実際にヨシフミと接するまでは，およそ良いイメージは持てないでいた。外見的な肢体の不自然なゆがみも無論のこと，“障害児”一般に対する異和感があり，それとかかわることへの抵抗も小さいものではなかった。頭の中では，“彼らも人間として，生き生きと豊かに発達し続けていく存在である”と考えていても，外見的なものにこだわり，抵抗を感じている自分があり，一方，そう感じてしまう自分に対する嫌悪感もあった。そうした自分のイヤな部分に直面することにもまた抵抗を感じるものの，それを避けようとする自分は一層イヤな存在としてしか感じられず，とにかくも，自分の中の偏見や差別意識と取り組むためにも，ヨシフミと精一杯かかわってみようと思うにいたった。

ヨシフミを実際に抱きかかえてみると，眼震や喘鳴の多さに驚き，また全身の筋緊張の強さを直接肌で感じ，まず障害の重さを実感として味わうことになった。食事介助の時などに，ヨシフミなりのサインがあり，それに応じて接していけば良いのだと，母親から教えられるが，板倉自身の緊張や焦りがあって，そのサインが“これなのだ”という確信がもてないまま，おっかなびっくりで働きかけていた。

そのように不安をもちながらも，ヨシフミを抱いてい

ると，事前に感じていた外見的なものに対するこだわりが，ヨシフミとかかわることにとっては，きわめて表層的な事柄だと感じられ，板倉自身でも驚くほど速く，ごく自然に氷解していった。瞳が大きく，色白のヨシフミを“すごく可愛いと感じる”ことができ，そのことを板倉自身嬉しく思うが，一方で，笑った後に，てんかんの発作が起こることもあると聞かされて，ヨシフミの笑顔を始めとするさまざまな反応を素直には喜べないという複雑な気持ちになっていく。

日差しの中を散歩するだけで発熱するヨシフミを見て，“体温調節も満足に出来ないのか”と，生きていること自体に“危うげな感じ”が常につきまとい，危険なことは極力避けたいと思ったという。とにかく不安は高かったが，その不安を打ち消そうとして，声かけを多くして疲れていったのかも知れない。

そこから抜け出すのは時間がかかったが，それでも回を重ねるうちに，少しづつその日のヨシフミの調子がわかるようになってきた。“アーアー”という発声も，“声が出るんだな”という程度にしか聞いていなかったが，快の時，不快の時の反応として理解され始めた。トランポリンで揺られたり，抱かれたりすることを，好み，表情がゆるむことも感じられ，積極的に喜ぶことをやってみようという気持ちになってきた。そうしてヨシフミの喜んでいる様子を見ると，板倉自身も何となく安心できる感じがあった。しかしまだ，具体的な食事場面でいえば，母親のように，手速く，多くの量を食べさせられるようになることが良いことなのだと考え，接し方には余裕がないままで過していた。

第Ⅱ期<自分の担当児なのだという思い，9～12月>

7月の合宿の後，また少しレパートリーが増えたヨシフミであったが，9月に入って転居があり，それと前後してヨシフミも体調を崩して発熱が続き，欠席がちになった。担当児が休んでいると，かえってその出席を待ちわびる気持が高まり，“自分の担当はヨシフミなんだ”との思い入れが，板倉の中で強くなっていく。

たまに出席した時には，ヨシフミとのかかわりを大事にしたいと思い，ヨシフミの喜びそうなことを探し，極力全身を動かすような働きかけをしようと努めた。

喘鳴や眼震は，あい変わらず目立つが，激しく喉を鳴らしながら，顔を真赤にして必死で頑張っているヨシフミの姿に，“障害も確かに重いけど，本当にたくましく生きている強い子”という認識が実感を伴って，板倉の中で育っていく。

また，この時期，家庭との連絡を繰り返しているうちに，母親の大変さに共鳴できるようになり，父親も含めて家族との交流も深まってきている。

第Ⅲ期<待つことのできる余裕，1～3月>

年が明け，ヨシフミも体調を快復し始める。まだ本来の調子には戻らぬまでも，表情はしっかりしてきていた。おしめを替えた時などニコッと笑うのが，板倉にも快の反応としてよく理解できるようになったが，発作へのつながりを思うと，まだ十分に喜べない気持ちもあった。ただ，感覚遊びでは，特に味覚に対する反応性が良く，“案外，刺激を感じて反応しているのだな”と認識を新たにさせられた。同時にヨシフミの表情の変化が捉えられるようになった自分を嬉しくも感ずる板倉であった。

待つことのできる気持ちの余裕が出来てきたことは大きく，食事も無理せず，体調に合わせて食べさせれば良いと思えるようになった。薬のせいで眠っている時も，目が醒めるまで見守っていられることができるようになった。ヨシフミのペースが板倉にもわかり，慣れてきたためといえるが，そのことにより，ヨシフミとの時間が板倉の中では，“自分にとっても大切な時間”として位置づけられていく，

また，喉に食物が詰まればそれを吐き出す力がヨシフミにあることや，快・不快をこちらに訴えかけるサインを持っていることも理解でき，その“生きようとする力”の強さを信じられるようになってきた。そのことは，板倉の接し方から，いわゆる“おっかなびっくり”の姿勢をなくすことにつながったと同時に，それまで，白々しさを伴って聞こえていた，ヨシフミを全面的に受容する両親の言葉が，異和感なく受け止められ始める。この時点で，ヨシフミを生活の中心に置く両親の生き方に，素直な共感を覚えていた。

2．ノブコとの取り組み（後藤由の場合）

第Ⅰ期<早くノブコを理解したい，5～7月>

担当が決まった時，後藤は，笑顔の可愛いノブコに対して親しみ易い印象を持った。しかしその一方で“笑顔に惑わされないで，ノブコの反応を正確に理解しよう”と自戒することで，思ったより反応が乏しいこと，了解不能の内発的な動作や表情の変化が多く，その障害の重さをいやでも実感させられる。

具体的な接し方は，どのようにしたら良いのかわからず，力を入れすぎないようにと，おそるおそる働きかける。たとえば，ミルクをスプーンで与える時でも，タイミングがあわず，ノブコがむせてしまうこともよくあり，そんな時は“無理に口から飲ませなくても”と思い，多少の後めたさを感じつつ，鼻腔から通したカテーテルを使って済ませてしまうことも多い。

発作の時には，どうして良いかわからず，おろおろするばかりであるが，喉につまるタンの出し方や，股関節

脱臼のあるノブコの抱き方などは，少しづつ慣れてくる，それにつれて，笑顔につりこまれて，自然に笑顔になれる瞬間も，もてるようになってくる。

第Ⅱ期＜ノブコのことが自分のことのように，9～11月＞

ノブコに対する接し方の要領がわかってくるにつれ，段々，自信とゆとりのようなものが生まれてきた。強い発作の時などは不安になるが，余程のことがない限り，ノブコが泣いても，それによって動揺し不安になることはなくなった。

多少はノブコの側の変化もあったが，表情の変化や反応の多様性が捉えられるようになってきた。抱かれた時の嬉しそうな表情，眠たい時のぐずり泣き，体調の悪い時の不快な泣き声などが，後藤にも感情の表出として受け止められてきた。

ノブコの中の意外に豊かな感情に気付くことは，ノブコに対する後藤の気持ちを刺激し，“いとおしさ”を感ずるまでになってきた。ノブコの笑顔や体調の良さを励みとして，積極的に働きかけようとの気持ちになり，それにつれて，ノブコのことをほめられると自分ことのように嬉しくなったり，ノブコが悲しそうに泣いていると，“どうしていいかわからず自分まで悲しくなってしまう”という感情の動きを体験することになる。

ノブコの存在は，後藤にとって“特別な存在”となり，ノブコのためになることを何かしてやりたいとの思いも強くなってきた。

第Ⅲ期＜あきらめと期待，12～3月＞

例年になく風邪もひかず，元気に冬を過ごせたノブコであった。表情の変化もはっきりしてきた。しかし，薬の量を減らした影響からか，発作の回数が増え，そういう時は，表情にも生気がなくなってしまう。ミルクも口から飲める量が少しづつ増えてきたが，股関節の脱臼はひどくなったようで，姿勢によっては痛がって泣くことも時々ある。

そうしたノブコに対し後藤は，“自分自身の子どものような感覚”を抱く一方で，“一歩離れたところでノブコの反応を見ることができている”という。しかし，この段階で，“これ以上，2人の間でのかかわりあいを深めることは不可能”といった実感をもつにも至っている。ノブコの笑顔やその発達を素直に喜べる後藤であるが，それだけに，他児と比較して“もっと反応してくれたら”とも思わざるを得なかった。

そのため，この時期の後半は特に，脱臼のことや，背骨の湾曲にこだわり，手足の動かし方や，姿勢のとらせ方などを工夫するのに熱心になっていたが，その分，ノブコの内的な動きから目をそらしていたのではないかということも，反省点となった。

3．マキコとの取り組み（藤本の場合）

第Ⅰ期＜マキコの体の重さ，5～6月＞

療育中のマキコは，始めから，抱かれていても少しも嬉しそうではなかった。何も感じていないかのように体の力を抜いているか，拒絶的に体を反らせるかしかせず，表情もほとんど変わらないという印象が強かった。食事の時も，スプーンで口に入れた流動食を，何度も何度も舌で押し出してくる。その度に口の中に入れても，執ように舌で押し出すマキコに対して，藤本は，“あせってはダメと何度も自分に言いきかせながら”取り組み続ける。“たくさんの声かけ，たくさんのゆさぶり，そんなものを手当たり次第にぶつけていれば，いつか報われるかも知れない”と考えていた。しかし，いつまでたっても反応を返さないマキコのあまりの手応えの乏しさに，マキコの身体の重さが身に泌みて，“私の働きかけが通じていないのだろうか”との疑問と共に，“寂しさとじれったさ”を感じ続ける。

そのように進展のないマキコとの関係が，母親に伝わり，気を遣わせるのがこわくて，母親との会話は，あたり障りのない楽しいことを，ことさら選んでするようになっていた。

第Ⅱ期＜マキコの世界の受け止め，6～11月＞

マキコの反応や発達的変化は，あい変わらず表立って感じられなかったが，そうしたものを求めるよりも前に，まずこちらが心を開いて，マキコの気持ちやマキコの世界に目を向け，そのあるがままを受け容れていこうとする構えを持つに至った藤本であった。それは，連絡ノートに書かれた“朝，カーテンを開けて光を浴びると，とても嬉しそうに笑う”という母親の記述を読んで，“マキコはそういう子なんだ”と気付いたことによる面が大きいように思われる。まわりの雰囲気を全身で受け止めた時に，自然に反応するのが，マキコの世界なのだと藤本にも思えるようになってきた。“マキコは多分，こちらからの働きかけは，わかっていると思う。けど，少々のことには驚かない。たじろかない。喜ばない。ゆさぶりも，名前を呼びながら長く続けた時，自然にマキコの中から笑いが湧き起こってくる”。こうした藤本の捉えは，まだ十分な根拠を持った確信とまではなり得ていないが，そう信じることで，藤本には，マキコとの間に心理的距離を置いて受容することができてきた。

“私から離れて，ひとりマットの上で手足を動かしているマキコの楽しそうな様子を見るのが嬉しくなった”という藤本は，母親との間でも通じる部分が多くなり，母親と2人でマキコの姿を見つめている時間を過ごすこ

とができるようになった。

第Ⅲ期<変化の手応え，11～3月>

秋になる頃から見られた食事場面でのマキコの変化には，著しいものがあった。かなり長時間の座位をとれるようになったことが大きく影響していたのだろうか，食事もスムーズに喉を通るようになり，食事のレパートリーが著しく増えてきた。春先の泣きたくなるような苦労が嘘のような，急速な変化であった。

それだけのことができるようになったにもかかわらず，情緒面でのマキコの変化は，期待したほどのものではなかった。一方の変化が，驚きを持って嬉しく感じられると同時に，藤本の中では，マキコの感情の動きを求める気持ちがふたたび強まり，積極的にゆさぶりかけようとしていた。気長に呼びかけを繰り返し，楽しい体験を共に作っていくうちに，マキコはいつかそれに応えてくれそうだとの感覚が，そうした藤本の気持ちの支えとなっていたものであろう。

母親の側は，就学をひかえて迷っており，その気持ちを連絡ノートにも書いてきたが，藤本自身には，それに応えるだけの力量のないことが，悲しい程自覚されてきた。しかし，頼りのない自分であっても，誠意をもって一緒に考えようとするしかないと思ううちに，母親自身は自分で，マキコの進路を決断していった。

4．ユウコとの取り組み（中の場合）

第Ⅰ期<期待の大きさから自信喪失へ，6～7月>

ユウコは，病気のため参加が遅れ，6月に入ってからグループに入ってきた。それまでの1カ月あまり，担当児を待ちわびる思いでいた中は，“これでやっと自分も療育グループの一員らしいことが出来る”と喜び，ユウコに対しても，始めから好意的な印象を抱いた。“ユウコの大きな瞳が生き生きと輝いて見え，それが印象に残った”というのが，中の得た第1印象であった。

しかし，実際にユウコと取り組んでみると，全身の強い筋緊張に戸惑った。中が働きかければかける程，足の先まで緊張で固くなっていった。周囲の状況や雰囲気を感じて，それに反応するだけの力を持ったユウコであるだけに，何とかリラックスさせてやりたいと思ってかかわる中の働きかけは，逆にその緊張を強めることにしかならなかった。

慣れない抱き方や介助しかできない自分に責任を感じつつ，不安と焦りを持ってかかわる中は，始めの意気込みと期待が大きかっただけに，挫折感も大きかった。他の療育者が楽しそうに子どもと取り組んでいる様子を見て，自分のかかわりは下手なのだと一層自信をなくしていく。

母親とは，比較的早い時期から，友達同士のような気軽さで何でも話せるような親しみを感じている中であるが，ユウコとうまくかかわれていないことが，どこかで負い目になっている。ここでもまた，母親の期待に応えられていない自分の姿に，力量のなさを改めて認識させられることになった。

第Ⅱ期<ユウコの涙の意味するもの，7月末～11月>

夏の合宿は，中の気持ちの上での転機となった。父親に抱かれて安心したかのようにリラックスしているユウコの姿，母親と共に入浴させた時に見せた幸せそうなユウコの表情に，両親とのつながりの強さを感じ，ひとりの力でユウコを発達させようとしていた自分の姿に気付き，勝手な気負いがとれ，肩の力が抜けていく感じであった。その時父親の腕の中でミルクを飲むユウコの目尻からにじみ出る涙に，ユウコの“生命の深さ”とでもいうべきものを感じ，胸が熱くなる思いであった。

その体験が転機となり，少し距離をおいてユウコを眺め，ひとりの人間として接しようとするうちに，見えなかったさまざまな側面が見え始めるようになってきた。

ユウコの側も，緊張を示す時間が短くなり，中の働きかけに対し，声や表情や全身を使って応じているのが，中に理解できるようになってきた。“アー”と甘えた声で接触を求め，抱かれると幸せそうな表情へと，微妙に変わるユウコを腕の中にして，心から可愛いと思えてくる中である。

食事の時も，新しい献立に反応し，いつもよりもよく舌を動かし，“アー”と催すような声を出すユウコに，こんな感受性があったのかと，改めて認識させられることもしばしばであった。

第Ⅲ期<家族の力への信頼，12～3月>

何とか健康な子どもを産んでみたいと，母親は第2子を妊娠し，冬に入る頃からつわりがひどくなってきた。加えて1月に入ると，父親の長期出張が決まって，東京と名古屋の往復生活が始まり，母子2人の生活が多くなる。それまで父親を頼りにしていた母親は，“しっかりしなくちゃ”との決意とは裏腹に，元気をなくしがちとなってきた。

こうして休みがちとなったユウコは，出席した時も，母親の心身の調子を反映してか，表情に生気がない。緊張も強い，しかし，療育していると，その終わり頃には，緊張が低くなり，表情もよく動くようになって，発声も増えるなど，日頃の調子に戻った印象が得られた。さらに，療育のあった日は，1日の生活にリズムが出来るせいか，夜も4時間程度の深い睡眠がとれるという報告を母親から受け，中は，ユウコとかかわる活動の意味を改めて感じさせられる。

こうした手応えが，不調のユウコとかかわる中の気持ちの支えになっていた点は大きい。しかし，それにもまして，ユウコの発達を確固とした力で支えている家族に新しい展開が起こりつつあることを肯定的に捉え，その力が一層確かなものになっていくであろうことを信じられていたことは，このユウコの落ち込みの時期に，共に落ち込むことなく中が過ごせたことの大きな要因となっているように思われる。

Ⅳ．まとめと考察

1．療育者の初期成長過程における発達課題

1）障害児に対する生理的異和感・嫌悪感の克服

子どもの障害が重ければ重い程，それに取り組もうとする療育者は，自分とは異質の存在として，その子どもをうけとめてしまうことが多い。特に重い障害児と初めて接する場合には，きわめて普遍的な感覚として起こってくるようですらある。私どもが，毎夏，愛知県コロニーで重度心身障害児とのかかわり体験実習を，4泊5日の日程で続けるようになって15年になるが，そこでも，初めてこれら重度心身障害児と接する実習生たちは，こうした生理的ともいえる異和感に，まず直面することから始まる場合が多い。（その体験の一部は，村上　1976に詳しい）

それは，その子どもたちの肢体が奇異にゆがんでいることから感じられる嫌悪的感情であったり，行動の予測できないことからの不安や恐怖であったり，“かわいそう”という憐憫の情であったり，表面的な感情移入から生じる“悲しみ”や“虚無”であったりする。私どもの経験では，こうした5日間の体験実習を経て，ほとんどの者は，こうした感情が，先入観や偏見にもとづくいわばいわれのないものであることを，ほぼ洞察できていく。

ここでの報告においても，板倉の感じていた“外見的なものへのこだわり”は，子どもをその腕に抱いてみてほとんどその場で解消されていく。“この子とかかわるということにとっては，きわめて表面的なことでしかない”ことに気付いたと，そこで述べているように，子どもとの心理的距離が近付くことによって，氷解していくような性質のものである。先のコロニー実習の場合においても，実習終了後の実習生が，その体験を整理して，“ふつうの子どもと変わらないと思うようになった”と述べる内容も，同様のことを示しているといえる。

そうした異和感の中でも，“この子たちの生きる意味は何だろうか”という形の疑問として出されてくる感覚は，比較的解消し難い部類に入るように思われる。子どもとの距離が近くなることで，一時的に忘れられることもあるが，それはその後も，子どもを対象化して，自分と離れたところのものとして眺め的に捉えようとする姿勢になるたびに，再燃し続けるような性質のものでもある。人が生きるということは，理屈を超えた，もっと不可思議で厳粛なものであることを，この子どもたちから教えられたという，人生についてのより深い洞察を含んだ実感を得る時，それは解消されることになるものと思われる。しかし，そこに至るまでには，自分の人生観や人間観，他者に向ける根深い差別意識を問い直すことを要請される。まさに人間としての成長の過程であるともいえるだろう。

多くの場合，この異和感は，それを抱くものにとっても克服すべきものと位置づけられる。板倉が“そう感じる自分がイヤ”で，この意識を克服し，自らの成長の転機を得ようとして参加したという述懐に，それは端的に示される。その例のように，知的な水準での理解はある程度できていることが多く，一応表面的には解消されていく場合を，私どもは多く体験している。

ただ，障害児と長年取り組み続けても，ふとした折に，自分の内面深く抑圧されていた差別意識の発露に気付くという体験をすることがある。この第1の課題に限らず，すべてここに述べる発達課題は，多層構造をなし，その後の取り組みの過程の中で，繰り返し体験され，療育者を戒しめ続けるような性質のものといえるのかも知れない。

ともかくも，ここで報告した4名の療育者の場合には，コロニー実習の体験もあり，障害児との取り組みを志していただけに，この段階でのつまづきはそれほど見せないままに，次の段階へと入っていったものと思われる。

2）うまくかかわりたいけどかかわれないというジレンマの処理

子どもとの取り組みが始まる時には，いつでも，うまくかかわれるだろうかという不安と，多少の期待とが交錯する軽い興奮がある。さらに，療育する以上，担当児との間に何らかの深いかかわりあいを作らねばならぬとの義務感や，それに伴って思い描くさまざまな療育のイメージがある。そしてその“枠組み”は結果的に，療育者の自然な動きを束縛し，かかわりの展開を急ぐ気持ちへと療育者を駆り立てることになる。それは始めの“意気込み”とか“気負い”の形で自覚されてくる。また，ある場合には，不安や自信のなさが先行することもあるが，基本的には，交錯する両面感情のうち，どちらが前面に出て意識されるかという違いに過ぎない。

どちらにしても，当初の療育者の動きは，共通して“おっかなびっくり”であり，戸惑いである。またそれを知的に処理しようとすれば“難しさの自覚”や，一歩退いた形で理解しようとする動きになったりすることもある。

この間の中の体験は“初めてユウコを見た時，生き生きとした表情で，発声も多く，刺激に対する反応もよく，すぐ何らかのかかわりがもてそうな気がした。しかし，始めに抱いた自分の枠や，意気込んだ気持ちとは裏はらに，強い緊張を示し，私の慣れない接し方に，全身で敏感に反応するユウコを前にして自信を失い，おっかなびっくりのかかわりとなってしまった”というものであった。板倉の場合は，“この子にとって大事な自分であろうとする気負いが強すぎ，接し方に余裕がなかった。その不安を打ち消すかのように声かけを多くしていった。ヨシフミが喜ぶと自分も安心できるという気持ちからだった”というものである。また，“ノブコに対し，笑顔が可愛いと感じ，親しみ易い印象をもった”という後藤は，“少しでも早く理解しよう”と努めるが“どういう接し方をすれば無理をさせずに済むのかわからず，おそるおそるノブコの表情を見ながら接するが，うまくいかない時には，逃げてしまい，一所懸命取り組む他の療育者に対し，後めたさを感じてしまう”と述べている。

この感覚は，基本的に療育者の未熟意識に根差している。“自分が未熟であるためにうまくいかない”という意識が，始めに抱いていた“療育とはかくあるべし”という先入イメージを崩すことになる。こうした観念的な枠組みが，いったん崩されることによって，次への展開が可能となる。そして，取り組みを気長に続けるうちに別の新しい視点が開かれ，療育者の中の肯定的感情が動いてくる。それは，療育者にとって，知的な水準での理解から，情緒的水準での受容へという変化であるといえる。

中の場合には，“両親の大きな愛の中で”生きているユウコの姿を目のあたりにすることで，肩の力が抜け，そのことが，ユウコの“涙の美しさ，意味深さ”に気付くことの背景をなしている。さらに，ユウコの反応が理解できるようになると，“かかわりを求めるユウコの気持ち”が見えてくる。板倉の場合も，時間はかかったがヨシフミの病気を機に，“２人の時間を大切にしたい”との構えが作られ，ヨシフミの“生きようとする力”を感じ，“ヨシフミの出しているサイン”が，わかるようになってくる。後藤の場合にも，少しづつノブコに対する“接し方の要領”がわかってくるにつれ，“自信とゆとりのようなもの”が生まれ，ノブコの表情の変化や反応の多様性が見えてくる。そして“ノブコの中の意外に豊かな感情”に気付くにいたる。その時，療育者の中で生ずる感情は，共通して“いとおしさ”“思い入れ”“心から可愛いと思った”といった類いの好意的なものとなっていく。

3）子どもとの心理的距離の喪失への気付き

それまで感じられなかった子どもの反応を感じ，心から可愛いと思うことのできるようになった療育者は，しばしば子どもとの心理的距離をなくしていく。

後藤のいうような“ノブコのことをほめられると自分のことのように嬉しくなり，ノブコが泣いていると自分まで悲しくなってしまう”といった心理状態や，藤本がマキコの動きのひとつひとつに自分への拒絶を感じとり“寂しさとじれったさ”の感情に支配されていく動きなどはそれに該当する。療育者は，子どもとの間で自・他の分離感覚をなくし，過度の共鳴あるいは自己内のコンプレックスを投影した形での思い込みが生じている。前年度の報告の中でも指摘しているが，やはり療育経験１年目の稲木における“子どもに対する拒否の気持ちから来る落ち込み”であるとか，杉田における“自分の枠組みへの子どもの取り込み”あるいは，鈴木の場合の“子どもの世界へののめり込み”なども，やはりこうした心理的距離の喪失を示す動きに他ならない。（後藤ら　1984）

杉田の場合には，そうした点への自己洞察が起こりかけてはいたが，今後の課題として残された。鈴木においては，“密着”に気付き，分離を志向し始めていたが，知的理解の水準で意識的に距離をとろうとした段階にあった。稲木の場合は“自分のやり方でやっていこう”と自己受容的な気持ちになったことが背景となって“自分の枠組みでかかわるのではなく，子どもの枠組みに自分が入っていこう”と思うことにより，安定した受容性が発揮できる距離をとり得るようになっている。（後藤ら　1984）

また，後藤の場合には，ノブコに対する“正確な理解”を心掛けたいというように，知的な意識水準において最初から分離を志向していた。そのため前年度の３名のように，いわば楽天的で現実遊離的にモチベートされることも，子どもとのかかわり方で悩み，自罰的に落ち込むこともなく過ぎていくことになった。板倉の場合には，その分離の志向性がより一層明確に示され，知的理解の水準でヨシフミの細かな動きを捉えられるようになるが，情緒的な共鳴の体験は，十分深められぬままに終わっていく。

藤本の場合にあっては，母親のマキコに対する無心で自然な理解に触れて“まずこちらが心を開いて，そ

のあるがままを受け容れていこう”と思えたことによって，思い込みからも自由になれている。中の場合，ユウコの涙に“胸を熱くした”体験が，かなり深い情緒的な体験となり，ひとつの重要な療育の方向を実感できたようであった。そのことで子どもと自分の姿を見失うことなく“ひとりの人間としてかかわろう”と心から思えたことは，共鳴と分離が両立することによって成立する共感の世界へのプロセスを拓くことになったといえる。

これら藤本や中，あるいは前報告での稲木の場合は，他の療育者と異なり，より軽度とはいえ，別の形で障害児とのかかわり経験を，それ以前から持っている。そこでの経験の蓄積が，自分の内にある枠組みの存在と，心理的距離の喪失に気付かせたのかも知れない。

4）発達援助者としての無力感との取り組み

子どもの僅かな変化に一喜一憂したり，反応のなさに気持ちが沈んだり，実際の姿をゆがめて見ていたりすることがなくなり，子どもとのかかわりが，療育者の中である一定の安定を得てきたとしても，望ましい発達的変化が目に見えて得られない子どもを前にして，初心の療育者はより深い無力感に直面することになる。

子どもが発達してきたという手応えを持つことができれば，問題は一時先送りとなる。しかし重い障害を持った子どもたちの置かれた生活場面，社会状況などに目が向けば，療育者はまた深い虚無感や無力感に捉われることになる。そうでなくとも，子どもは常に期待通りの発達をし続けるわけではなく，それを期待すれば必ず“裏切られた”との感覚を抱き，それでも“障害が重いんだから仕方ない”とも思いつつ，療育者は行き詰まりを感じていく。これは，基本的には，心理臨床の実践を行なう者にとって，宿命的ともいえる内的な取り組みの課題である。現実の子どもの姿や，置かれた状況が理解されればされるほどに，自分の力の及ばない部分の多さが身に泌みて感じられるようになってくる。

私どもが，この療育グループの経験者を対象に，自由記述形式の質問紙によって療育経験を振り返ってもらった調査（後藤ら　1981）の中に，次のような記述が見られる。

“『どうしたらいいのだろう』と自問自答しながら，また『重度なんだからしかたがない』というほかの人のことばに失望しながらの取り組みでした。12月頃までは一所懸命，ユリコを抱いてやったりおぶってやったりしていました。しかし12月の終わりのクリスマス会の時，私自身相当疲れていて，またユリコの調子も悪くて，その時『ああダメだ，一緒になって落ち込んじゃう』と思った時から，たしかにユリコへの思い入れが減少していきました。それからは，ユリコの居ない時の私の方が生き生きしていたのではないかと思います。お母さんが連絡ノートに『少しでも手足を動かすことになって，刺激となるから，療育に通うことは良いことだと，さるお医者様が言ってみえた』ということを書いてこられましたが，それだけだったとしたら，大変虚しい思いがします。集団遊びにも入れず，発作のため調子の悪いことが多く，自由に動かしてやることもままならなかったユリコにとって療育の意義は，自己満足の域を出ないとしか思えないのです。ただ私にとって救いだったことは，最後の会の時に，ユリコが私にしがみついてきたことでした。やっとユリコにとって信頼できる人になれかけたのかしらと思えた瞬間でした。”

この療育者の場合，比較的自分の枠組みでの思い込みを作る形で距離をなくしていたと思われたが，対象の子どもの反応のなさに気付き，てんかん発作の頻発で調子の悪いこともあって，それに巻き込まれてしまいそうな自分自身を感じ，かなり意識的に距離をとろうとしている。そこでは，前節に示した第3の課題において，発想の転換を促す深い気付きの体験の得られぬままになされた分離の志向性が見られている。結果的には，第三者的な眺めの姿勢をこの療育者にとらせることになり，“虚しさ”が前面に出てくる。その中で救いを求める気持ちの動きは切実なものとなり，最後の会の“ユリコのしがみつき”にその思いを託しているが，これもやはり客観的には，この療育者の“思い込み”の強い判断であったといわざるを得ない。

ここで報告してきた後藤の体験も，これに近いものがある。ノブコとの間で，ある一定の安定感を感じつつも，それより先に進めないという印象の強いノブコとの関係から逃げてしまう。“ノブコの気持ちになってみることを忘れ，あるいは意図的に放棄し，ノブコを忘れ，別のところで療育を楽しもうとしていた。まるで，ノブコはその内的豊かさを私になんて知られまいとして隠しているようにさえ思われ，私にはほとんど得られるもののない，根気のいる作業であった。”

後藤の場合も，ノブコとのかかわりあいに，ともかくものめり込んでいき，その中で悩み抜こうとする以前に，分離の志向性を持ったためであろうか，子どもとの情緒的つながりの希薄なうちに，相手を対象化して距離をとり過ぎることになった。後藤にはその点への自覚はあったようで，次のようにも述べている。

“思わずノブコから目をそむけた時，そこに逃げる自分があり，自分の弱さやエゴイズムを発見することにもなった。そして自分のもつ偏見，先入観，プライドなど，素直な気持ちになるのを邪魔するものを，ひとつづつ脱ぎ捨ててゆく作業でもあったように思う。

そうすることが，ノブコへ少しでも近づくことであったように思う”。中の場合には，ユウコが体調を崩し，母親のつわりで療育への出席そのものも出来なくなったような状況で，距離をなくして落ち込むことも，距離をとりすぎて自己嫌悪になることもなく，比較的安定した受容性を保ち得てきたと見られる。それは，たとえ微力であっても，ユウコに対する援助的意味あいを療育の中に見出し，さらに，より広い視野に立ってユウコの発達を見ようとすることによって可能となったように思われる。

藤本の場合には，客観的に見ても大きかった子どもの変化に救われたようであった。身体面での変化は明らかに目に見えるものであるだけに，手応えが明快であり，苦労が報われる思いにさせられる。しかし情緒的側面での変化の乏しさを，一層際立たせることになり，藤本の中に，そうした面での変化を求める気持ちが強くなる。表情や感情の豊かさを求めての取り組みの成果もなかなかあがらないにもかかわらず，藤本においては，辛棒強い苦労の末に報われた体験を持っているため，子どもの発達の可能性を信じて，かかわり続けることが出来ていく。

あらゆる療育活動には，常に限界がある。しかしその一方，療育者は，援助者として有能でありたい，できれば万能でありたいと思う。その落差の間に，療育者の挫折感や無力感が生ずる。限界を厳しく認識することは，悲観論に結びつき易く，万能幻想の中で楽観的に療育をすすめることは危険ですらある。重度の障害児との取り組みに限ったことではないが，私どもは常に，自己の無力さにある種の痛みを感じつつ，それを正しく認識し，それと取り組んでいくだけの強さを要求される。それは，療育者が，自身の内なる人間観，発達観，療育観といった基本的な部分を問い直し，発達援助者として必要な知識と技能をみがき，力量を蓄えていくという地道な自己研讃を続けることであり，それがまた，この課題とその後も取り組み続ける足掛かりとなりうることであろう。

2．療育者の個性と発達過程

こうした療育活動のもっとも根幹をなすものは，療育者自身の人間性である。ひとりひとりの療育者の持つ個性的で人間的な持ち味が，子どもたちの人としての発達を，根底において援助する力となるといってよい。療育者として未熟であることが，子どもの発達にとって積極的な意味を持つことがあり得るし，また熟達した療育者が常に初心の療育者よりすぐれた援助者であるということもない点を認識することは重要である。未熟であれば失敗も多いが，それだけ豊かな発達のエネルギーを，子どもに注ぐことが，逆に可能となることもあり得る。肝要な点はおのおのの療育者が，己の持ち味を自ら知ることにある。

療育者にとって，共感能力や受容性，自己表現の豊かさが，基本的に求められることはいうまでもない。しかし，それらは療育者が本来持っている資質と無関係ではないものの，子どもに対する理解が深まり，そのかかわりに没入することによって，おのずから高められるような特性であるともいえる。療育者が子どもとのかかわりに没入することによって，自分の中に潜在していた豊かな人間性に気付かされ，開発されることとなる。そうした意味において，子どもとのかかわりは，療育者の自己成長過程であるということができる。すなわち，子どもとのかかわりを通して体験し，実感したことを，自己への気付きのための糧として，内在化していく作業こそが，療育者を成長させるものである。そのようにしてなされる療育者自身の内的変容が，子どもの発達をより豊かにしていくことにつながるものと理解することは，きわめて大切な視点となる。

療育者の持ち味が，子どもの発達にとって援助的となり得るのは，そうした前提に立ってのことであり，自らの成長を，療育者が拒絶するところには，相互成長過程の生ずることもない。その意味において，療育者は，自分の持ち味をいかに活かし得るかということを，重要な自己課題のひとつとして位置付けておきたい。

村瀬（1981）は“重症児と呼ばれる子どもたち”への発達援助を論じて“『限りない成長の可能性』などと大上段にふりかぶるより，まず，こういう子どもたちには，その存在，生をいかにどこまで深く享受させうるかということが当面の課題である”としている。また，子どもと取り組む発達援助者のあり方について，謙虚であらねばならないという次元で考えているだけでは不十分であるとして，“相手をひきうける覚悟，責任をもつことの重さ，責任感をどこまで深く己のうちに内面化できるか”という視点が必要であると論じている。

私どもは，単に知識として，こうしたことばを理解するだけでなく，真に内面化する努力をしていくことを要請されているのである。

しかし一方で，療育者は，これらのことが，自己内部での時熟を待って，はじめて深められていくものであることも，知るべきであろう。“受容”“共感”“子どもとの間の適切な距離”あるいは“謙虚さ”“素直さ”“責任性”といったことばは，いわゆる療育のキーワードであり，多くの者が知識として持っているものでもある。ただ，それらは技術ではなく態度についての指針で

あるという周知のことと照らしあわせても，きわめて体験的な感覚であることを忘れることはできない。たとえていえば，相手を“受容したつもり”になることの危険性を認識することはいうまでもなく，真の意味でのその実現の難さを認識し，自らに問いかけ続ける作業をしていかねばならない。

同様に，療育者は，子どもとのかかわりを深めたり，自ら成長しようとすることに性急であってはならない。子どもとのかかわりの初期にあっては，常にどんな時でも，ためらいがあり，わからなさが先行するものである。むしろ，わかろうとして戸惑い，わからなさを自覚し，なおかつそうしたかかわりの初期過程を肯定し，受容する気持ちが，どこかに必要とされる。療育者の成長もまた，子どもとのかかわりの中で体験される気付きや，感動があって静かに展開するものであるといえる。決してドラマティックなものではないが，療育者が，子どもとの間での体験のひとつひとつを，内面化していくことによって少しづつ深められていくものである。

こうした点を認識することによって，初心の療育者も，かかわりや，自己の成長の過程において，時熟を待つことが可能となるだろう。そして，時熟を待ってはじめて，より深い展開が可能となることに思い到るかも知れない。そうしたとき，療育者にとって真に必要な視点は，その時々の発達段階において，その時点での自分の持ち味というものに虚心に目を向けていくことなのではなかろうか。

本稿の執筆者として，名前を連らねることはできなかったが，昭和59年度の一年間，共に療育に取り組み，今回のまとめに協力してくれた水谷真，板倉由未子，後藤由美子（共に現名古屋大学研究生）ならびに藤本純子（現名東ワークス）をはじめとして，共にこの種の課題を自己課題として体験し論議を共にしてきたこれまでの療育の仲間たちに，感謝します。そして，これまで私どもを育ててくれた子どもたち，これからも育てていってくれるであろう子どもたち，さらには，その子どもたちを育て，育てられている御両親にも，改めて感謝の意を表したいと思います。

文　献

向野幾世　1978　お母さん，ぼくが生まれてごめんなさい　サンケイドラマ出版

後藤秀爾・村上英治・譲　西賢・深谷昌子・水野博文・柳沢好子・松原道世・小杉和江　1981　発達障害幼児の集団療育（その4）――10年の歩みをふりかえっての調査から――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**28**，209～226.

後藤秀爾・村上英治・中西由里・森崎康宣・加藤礼子・水野博文　1984　重度・重複障害幼児の集団療育（6）――療育者の初期成長過程の構造――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**31**，181－192.

村上英治　1976　重度心身障害児――その生の意味と発達――　川島書店

村瀬嘉代子　1981　子どもの精神療法における治療的な展開――目標と終結　小倉清・白橋宏一郎（編）児童精神科臨床2　星和書店

譲　西賢・村上英治・後藤秀爾・藤本章子・柳沢好子・高木昌子・服部孝子・北村由紀子・田垣裕美　1980　重度・重複障害幼児の集団療育（1）――子どもとのかかわりをとおしての療育者の動き――　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**27**，115－124.

（1985年8月7日　受稿）

ABSTRACT

A GROUP THERAPEUTIC PRACTICE WITH SEVERELY MULTIPLE HANDICAPPED CHILDREN (8)
– The early developmental tasks of therapists –

Shuji GOTOH, Eiji MURAKAMI, Yasunori MORISAKI, Reiko KATOH, and Miyuki NAKA

That therapists get contact with severely handicapped children means that the therapists themselves confront their inner complex and tacle it. The processes of their tacling are, on the one hand, differ individually, but on the other hand, common to some extent. It may be said that the processes are promoted only by the actual experience of tacling and the therapists, stage by stage, overcome several foundamental developmental tasks.

In this article, we tried to clarify especially the early developmental tasks of therapists, and examined the process of overcoming the tasks.

The early developmental tasks that we extracted are the follows;

1) confrontation with themselves who have unintimate or averse feelings instinctively toward handicapped children.

2) confrontation with what they are who cannot get contact with them as they expected or imaged.

3) awareness that they are not at appropreate psychological distance from them, and confrontation with their actual manners of relationship as such.

4) confrontation with themselves who cannot develop handicapped children as they expected and are impotent as supporters.